書評 01

野坂昭如 著

『農を棄てたこの国に明日はない』

家の光協会 /2017 年 2 月刊 /240 ページ /1500 円＋税
ISBN　978-4-259-54761-5

評者：青木 美紗
奈良女子大学 講師

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、自国民の食料を確保するために輸出規制に乗り出す国、国民に農林漁業への従事を促す国などが出始めている。日本はこれまで、グローバル化の波に乗るために、自国で日常的に消費する食料よりも、高付加価値化、輸出などに重点を置く政策を採ってきた。しかし今回、世界的に感染症が拡大する中で、行き場を失う農林水産物があふれ、食料生産を見直さなければならないことに気づいた人も多いのではないだろうか。このような危機感は、何も今に始まったことではない。本書は、太平洋戦争で飢えを経験した筆者が、食を自給することの重要性について、戦時中の体験と戦後の日本の農業のあり方から述べているものである。現在にも何か共通することが見えてくる。

筆者である野坂昭如氏は、1930 年生まれであり 14 歳の夏に終戦を迎えた。その後、小説家として活躍し、童謡「おもちゃのチャチャチャ」でレコード大賞作詞章を受賞、『火垂るの墓』で第 58 回直木賞を受賞するなど、私たちにも馴染みのある作品を残している。本書は筆者が家の光協会が発行する『地上』などで発表した、農業や食糧問題に関するエッセイや対談を編纂したものになっており、2015 年 12 月に筆者が逝去したのちに出版されたものである。小説とはまた異なる形で、大事にしたいと筆者が考えていたことを知ることができる。本書の構成は、第 1 章「日本人よ　飢えをわすれるな」、第 2 章「農業問題は、消費者がまず考えなければならない」、そして第 3 章「野坂昭和×山下惣一　手紙談義　農を棄てたこの国に明日はない」の 3 章立てになっている。以下において各章について少し紹介する。

まず第 1 章では、「『思考停止』70 年　命の危機　敗戦から学べ」「ひどい世の中じゃ　こわい世の中じゃ」「都会よ飢えを忘れるな」などの 5 つの記事と、「財界は農業をこう見る」というタイトルの筆者と元経団連会長である土光敏夫氏との対談が掲載されている。記事では、戦時中に多くの餓死者（特に子どもと老人）を目の当たりにし、飢えがどんなにやさしい心の持ち主の人間であっても食糧を他人に分け与えることが難しく争いにまで発展することなど、食糧がいかに社会の安定に重要であるかを、戦時中の状況から学ぶ必要があることを述べている。しかし戦後は、「飢えに苦しんだ経験をあっさり忘れ、食い物は他国にまかせ、その食い物の大半を破棄し続けている」と戦時中の経験を生かせていない日本人に警鐘を鳴らすとともに、食糧以外の社会政策においても日本の将来を憂慮していることを伝えている。戦後、アメリカの食糧を大量に輸入し、自国で十分に自給できるだけの環境があるにもかかわらず、食糧自給を軽視してきた日本では、いつか「かならず食糧は不足する」という。「二度と飢えた子供たちの顔はみたくない」という筆者の強い想いが、このような警鐘に繋がっている。

戦時中にもっとも飢えに苦しんだのは都会の人々であったという。筆者には田舎がなかったため、田舎がある友人がうらやましかったそうだ。しかし戦後は、都会の人たちは安いものだけを求め、今の農業がどれだけ割に合わないものかも知らない人がほとんどである。現在は、当時に比べて田舎のない都会人が圧倒的に多く、また都会から食糧生産地までの距離も当時よりも圧倒的に遠くなっている。近郊に食糧生産地がないことが、いっそう都会において食糧不足を引き起こす可能性を高めているという。さらに、「農業をかえりみぬことが文化を滅ぼしてしまう」と考え、自然を相手にする農業に携わる者には存在感の希薄など見られないが、生産性を重視する工業化の中で生きる人々の多くは、自身の存在の意味がわからなくなり想像力も働かなくなっていると指摘する。「食いものこそが、その土地の文化をはぐくむ」、このことを若い世代に伝えなければならないという強い使命感を筆者は抱いている。

元経団連会長である土光氏との対談内容も興味深い。「食糧問題をしっかり見直さなければならない」という両氏の考え方は一致しているのであるが、そのアプローチに対する考え方が全く異なることが読み取れる。農村出身で都会に出て経団連会長となった土光氏は、「農村を整備して、もっともっと効率的な農村ができるように国家も投資していく」ことが先決だと考えているのに対し、都会で育ち後に農業に携わった筆者は「これまでも整備というかけ声でやってきて、あげくはどんどん農村がおいつめられる」、「もっと具体的に、あるいは合理的に、食べ物についてどう考えるのかを、ひとりひとりに突きつけていったほうがいい」と答える。農業を他産業と同様に経済的効率性という視点でとらえるのか、あるいは経済的効率性を超えた自然環境や文化、生命の大切さまでを視野に入れるのか、という立場の違いが明確に出ており、現在の議論にも通じるものがある。

第２章では、現代の食の状況を述べながら食の根本を問い直す記事が記載されている。食品添加物の問題、国際化における食の在り方などを筆者の視点が述べられている。筆者は、国際化の大原則は「農業は自分たちのところできちんとやる、食いものについては自分たちの国できちんと賄う」ことであるとし、価格だけで評価するものではないと主張する。「食べものの問題は、子孫に対する責任であると同時に、二千年もの間、この自然条件でもっとも効率のよい食いものである米を育み、受け継いできた祖先に対する責任でもある」という言葉が重くのしかかる。その上で、消費者がもっと食べ物に対して賢くならなければ国内の食糧生産を維持することはできず、生産者と消費者が話し合えるチャネルやチャンスを増やすことが重要であると述べている。

そして第３章では、農民であり作家の山下惣一氏との手紙のやり取りが掲載されている。ここでは、工業化の名のもとに食や農を軽視してきた日本社会への危機感が両者によって述べられている。農業はカネを稼ぐ手段でいいのか？生や死を教えてくれる農業と向き合うことが、生きること全体に影響することを両者は伝えようとしているのではないだろうか。

「言っておきたい。いざとなったら、食いもののある国が生き残るのだ」という筆者の言葉は、今後のさまざまな危機においても通用するだろう。『火垂るの墓』で幼い子どもが飢えて命を落とすシーンは、子どもの飢えを二度と見たくないという筆者のメッセージであることが本書を読むとわかる。「米とはまさに八十八度の手を潜って(もぐって)作られたもの。おにぎりはその一粒ずつが生きている」、このことを想像しながらおにぎりを噛みしめる消費者をどれほど増やすかが今後重要であるだろう。それとともに食や農を通して直感を磨くことが求められるのではないだろうか。